

演題番号：C11

フェノバルビタール反応性唾液腺症にガバペンチンの併用が有効であったトイプードルの1例

○野田正志¹⁾，川原 弘¹⁾，松井明日花¹⁾，田中宏²⁾，中山正成²⁾

1) 天王寺どうぶつ病院，2) 中山獣医科病院"

1. はじめに：フェノバルビタール反応性唾液腺症（PRS）は、唾液腺の腫大、断続的な嘔吐や吐き気などを特徴とし、犬で報告のある稀な疾患である。本疾患の病態は解明されていないがてんかんの可能性が指摘されており、一般的にはフェノバルビタール（PB）によって臨床徴候が良好な経過を示すと報告されている。今回、PRSに罹患した犬においてPBに部分的に反応が認められ、ガバペンチン（GBP）の追加によって良好な経過が得られたため、その概要を報告する。

2. 材料および方法：9歳齢のトイ・プードルが急な流涎、断続的な嘔吐や吐き気の症状で受診した。一般身体検査、血液検査、画像検査で明らかな異常を認めなかったため試験的に対症療法を実施したが、症状の改善は全く見られなかった。初診から1か月間で既存の症状に加えて、新たに下顎腺および耳下腺の両側性腫大および同部位の疼痛、体重減少、間欠的な硬直・振戦とFly biting様の症状が認められた。頭部MRI検査では頭蓋内に明らかな異常は認められず、腫大した唾液腺の細胞診検査と組織生検では明らかな異常はみられなかった。

3. 結果：臨床経過および検査結果からPRSを疑ってPBに

よる治療を開始した。2日後には臨床症状に改善が認められたものの、流涎や吐き気はいくらか残っていた。そこで臭化カリウムとゾニサミドをそれぞれ順にPBとの併用投与を行った。しかしながら改善を認めなかったため、臭化カリウム、ゾニサミドを中止して、新たにGBPの併用投与を行ったところ、急速に臨床症状が改善し、体重も正常に戻った。その後、PBおよびGBPの併用を継続し、発症後2年間ほぼ症状が無い状態で維持されている。

4. 考察および結語：過去の報告ではPB単独で反応が不完全な場合は長期的な管理が難しく、他剤との併用も効果的ではないとされていたが、本症例ではGBPの併用によって臨床症状の改善が認められた。GBPには抗てんかん作用の他、鎮痛や抗不安作用もあることから、これらが臨床症状の改善に寄与した可能性が示唆された。このことからPBのみで管理が難しいPRS症例において、GBPは追加の治療薬の選択肢として有用である可能性が考えられた。本症例では発症当初は唾液腺の腫大が確認されなかったことから、唾液腺腫大がなくても嘔吐や流涎などを伴う症状の場合には鑑別診断にPRSを含める必要性が示唆された。